

# ヒビノグループ製品

青字…音響機器  
赤字…映像機器

## 1969 エコーマシン EMH-3P

磁気テープ式のエコーマシン。音声信号にエコー効果を付加する音響機器。  
当時、放送局や録音スタジオでは、音楽ホールのような響きを意図的に作り出す装置が使われていた。鉄板式やスプリング式のエコーなど上質な装置があったが、極めて高価なうえ可搬性もなかったことから、可搬型のエコーマシンを開発。  
BGM等の再生用に使われていたエンドレステープカート

リッジを採用し、1個の録音ヘッドに対して3個の再生ヘッドを取り付けた。サーボモーターでテープ速度を変えることができ、比較的幅広く細かな効果が得られた。各種施設へ納入する音響システムに組み込んだほか、PA用途で販売した。  
当機を追うように、楽器用音響機器メーカーELKからひと回り小さく安価な同様方式のエコーマシンが発売となり、製造を中止した。



## 1970 ワイヤレスシステム

ボーカル用ワイヤレスシステム。  
当時、国内メーカーからもワイヤレスシステムは販売されていたが、コンデンサー型が多く、コンサートのボーカルのような大入力音圧に適した商品はなかった。1970年8月よりShure（アメリカ）製品の販売代理業務を開始したヒビノは、ミュージックシーンにマッチした同社のダイナミック型マイクロホン「SM58」の音をワイヤレスシステムに求める。仕入先であるバルコムトレーディングカンパニー（現バルコム）の承諾を得て、SM58のマイクロホンヘッドを自社製ハンドヘルド型送信機に組み込みワイヤ

レスシステムを製作。ロックボーカリストの音量に、音質・音圧の両面で耐えうる性能を実現した。  
ボーカル用として音の評価は高かったが、ワイヤレス方式が不安定で信頼性に欠ける面もあった。当初は、期待に反して普及が進まなかったものの、Shure ボーカルマスターとともにアーティストへ採用されたほか、ホールなどの音響システムにも納入した。  
その後、大手メーカーからボーカルに対応したワイヤレスシステムやダイバーシティ方式採用モデルが発売され、当機の製造を終了した。



ハンドヘルド型送信機

## 1973~1974 PA用16chミキシングコンソール

PA用アナログ・ミキシングコンソール。16in、3out。コンサート・イベントの多様化から、マイクロホンの入力数を多く備えたミキシングコンソールが必要になってきた。また、当時のミキシングコンソールは放送用等の設備型が主で、PA専用の機器は出回っていなかったことから、自社PA部門の経験に基づき必要な機能と操作性を取り入れ、PAに特化した可搬型のミキシングコンソールを開発。インプットが16chもある音声調整卓はまだ珍しかっ

た。5台製造し、3台は販売、2台はPA事業部で運用した。  
必要な機能を満たす製品ではあったが、コストが高く販売価格は180万円だった。  
発売開始から1年を待たずして、当機より安価な16chアナログ・ミキシングコンソール「PM1000」がYAMAHAから発売となり、製造中止を決定した。



## 1977 ホームステレオ

アメリカ市場向けのホームステレオ。  
据え置き型のコンポーネントシステムで、ラインアップは4種類。  
1. AM/FM チューナー付ステレオ  
2. 8トラック・カートリッジテープ (AM/FM チューナー付) ステレオ  
3. レコード (AM/FM チューナー付) ステレオ  
4. 上記の全一体系型ステレオ  
いずれもプリメインアンプが一体となっており、スピーカー2台が付属した。

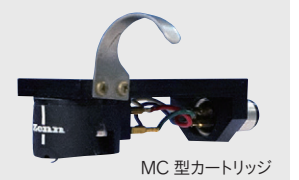
当時、アメリカ市場では比較的リーズナブルなホームステレオの需要が高まっていた。ヒビノは自社の原点である“ものづくり”で、創業以来初となる海外への挑戦を決める。貿易商社と共同で韓国に生産拠点「韓国ヒビノ株式会社」（資本比率50%）を設立。部品は日本製を用い、韓国にて製造。「Eversonic」ブランドでアメリカへ輸出した。出足は好調であったものの、直後に急激なドル安円高に見舞われ目算が狂う。計画は280円換算。レート200円まで円高が進んだところで撤退を決めた。



## 1980 レコードカートリッジ Zenn

MC型カートリッジ及びMCトランス。スタイラスチップはダイヤモンド。MC型は旧来のMM型より高音質だが、構造的に出力が小さいことからMCトランスもラインアップした。  
オーディオブームの中、輸出商材として当製品を企画する。レコードカートリッジ及び針の国内有力ブランド「SUPEX」に生産を依頼し、海外の一般オーディオ市場へ投入した。輸出用モデルであることから、日

本らしい名称をと漢字の「禪」から「Zenn」とした。Klipsch and Associates, Inc.（アメリカ）向けの製品はOEMであったためZennではなくKlipschブランドとしてアメリカを中心に世界へ販売された。音質の評価は高かったが、既存マーケットへの新規参入には困難もあった。軌道に乗り始めた頃にCDが登場する。アナログレコード市場の縮小とともに製造を終了した。



MC型カートリッジ



MCトランス MCT-200

## 1983 モニタースピーカー BBSM-6

Westlake Audio が、1982年に発表したスピーカー「BBSM-6」のうち日本で製造・販売したモデル。  
Westlake Audio に対して大型モニタースピーカー高級ブランドとしてのイメージが定着する中、新たにスタジオ用の中型モニターシステム BBSM が発売となり注目を集める。日本における輸入総代理店であったヒビノは、業務用はもとよりマニアックなコンシューマーを対象とした商材になり得ると判断。1983年前半まで BBSM-6 を輸入したが、1台48~54万円と高額な販売価格や生産速度の遅さが日本市場に合わず、価格設定及び納期を改善する目的で、Westlake Audio とライセンス契約を締結。国産の BBSM-6 を50台製造する。スピー

カーユニットは Westlake Audio から輸入し、キャビネットの製造、組み込みは国内で行った。結果、1台19万8,000円で販売可能となる。主にレコーディングスタジオや放送局へミディアムモニタースピーカーとして納入したほか、オーディオ愛好家などコンシューマー向けにも販売した。仕様は、アメリカ製も日本製も同じだが、キャビネットの色はアメリカ製が黒、日本製は木目だった。6インチウーファー×2、ミッド×1、ツイーター×1のユニット構成。名称のBBは“BASS & BASS”の頭文字で、BBSMシリーズの特長であるダブルウーファーを表す。また、樹脂製のコーンや横置き形状も特徴であった。ウーファーの口径は小さいが低域をしっかりと再生可能で定位置も安定していた。



## 1977 インターカムシステム ヒビノカム MS-100-RS-100 / MS-200-RS-200

可搬型のインターカムシステム。MS = Master Station, RS = Remote Station。  
当時はまだ、持ち運びが可能なインターカムシステムは出回っていなかったが、音楽ホールなどの常設設備には、ミキサー室、照明室、舞台袖など間でコミュニケーションをとるための音声通話専用回線とヘッドホンマイクがあった。これを可搬システム化してコンサートやイベントのステージへ取り入れるメリットに着目。自社PA部門と音響機器販売部門のアイデアを盛り込み、ヒビノカムを開発し

た。  
ヒビノカムは、ロックコンサート会場など大音量が鳴り響く環境でも、相手の声をクリアに聞き取ることができた。実用性の高さが評価され、PAマーケットに多く受け入れられる。  
発売当初は、PA業者がインターカムを所有すること自体が画期的だったが、ヒビノカムと、のちに発売されるアメリカ製インターカムは、PA事業者の必需品となった。



MS-100 / RS-100

## 1989 プロジェクションキューブ ヒビノキューブ

高画質な日立製リアプロジェクションモニター C42-PX1（ネオビジョン）のユニットをベースとした、44インチプロジェクションキューブ。画質の向上はもちろん、当時主流だったパイオニア製キューブの40インチから44イン

チにサイズアップしたことで差別化を図った。当初はマルチ向けに開発したが、本機を常設用に改造し、ボウリング場の大型レーンモニターとして全国に800台弱販売。日本のボウリング場レーンモニターの先駆けとなった。



寒川セントラルボウルに納入 (1991年)

**1995**  
音声分配器  
**HADA-206 / HADA-206II**

音声信号の分配器。2in, 6out。設備システムでの要望があり開発。設計は、音質はもとより業務用として信頼性を重視した。常設システム向け

のため入出力は先バラ。HADA-206 II は、HADA-206 の改良版。音響機器が、アナログからデジタルへと移り変わり、本機器の需要も減少した。



**1995**  
デジタル音声ガイドシステム  
**VOICEe**

世界で初めてアドレス伝送方式を採用したデジタル音声ガイドシステム。映像事業部が映像システム開発事業者のデルタコミュニケーションズと共同で開発した。当時の音声ガイドシステムは、テープや CD のエンドレス再生を聞かせるのが一般的で、ほとんどのユーザーがガイドを途中から聞くという不便さがあった。大阪の美術館より、誰もが冒頭から解説を聞けるシステムがほしいとの要望を受け開発。全ユーザーに冒頭からガイドを聞かせ、かつ多言語に

対応するため赤外線アドレス伝送方式を採用。音声ガイド端末を持ったユーザーが赤外線受信ゾーンに入ると、個々の端末のイヤホンから、適切なガイドが始めから自動再生される仕組みは画期的で、美術館、ショールーム等へ販売したほかアミューズメント施設や展示会などレンタルした。VOICEe の機能に対する評価は高く引き合いも多々あったが高価だったため採用されないケースも多かった。



音声ガイド端末（受信機）

**1995**  
立体映像システム  
**TRIVISION**

裸眼で立体映像（3D）を鑑賞できるシステム。自然で明るい立体映像をコンパクトな設備で楽しめる装置。映像機器メーカーの池上通信機と共同で開発した。当時の 3D 映像は、専用メガネをかけて見るのが当たり前だったが、裸眼で立体視できる「3D 写真」を発想の原点に開発した。覗き窓の左右に異なる映像を表示して 3D に必要な両眼視差を作った（両眼視差直視方式）。

左右の映像モニターは解像度の高い池上通信機製高精度モニターを採用。2台のモニターの視野調整に鏡を用いる構造を発売し、コンパクトな筐体が完成した。体験型学習施設などへ販売。裸眼で 3D 映像を見られる仕組みは画期的だったが、一度に一人しか見られない構造や高額の 3D コンテンツ制作費用が導入のネックとなった。



**1998**  
LEDプロセッサー  
**DLC-2218**

初の商用 LED プロセッサー。入力は RGB アナログ。出力は 8bit パラレル。表示解像度 640 × 480dot。内部処理 8bit。主流だった NTSC や RGB アナログを取り込んで高速デジタル信号処理を行い、リアルタイムで最適な映像を LED ディスプレイに表示することは、当時、画期的だった。

た。まだ大型機が多く見られる中、ラックマウントが可能な 4U サイズのコンパクトな筐体を実現。クロマテック社が蓄積したスキャンコンバーターの開発技術やノウハウが基礎となった製品。



ナスダックマーケットサイトに納入した DLC-2218

**1999**  
LEDプロセッサー  
**DLC-302**

フレーム変調機能搭載の LED プロセッサー。入力は RGB アナログ。出力は SD-SDI。表示解像度 640 × 480dot。内部処理 8bit。フレーム変調機能により 10bit 相当の映像表示を可能

とした。8bit が主流の時代に画質向上を図ったモデル。微細な色彩の再現力が求められる東京モーターショーで運用される。



**1999**  
LEDプロセッサー  
**DLC-3102**

高精細 LED プロセッサー。入力は RGB アナログ。出力は SD-SDI。表示解像度 640 × 480dot。内部処理 10bit。

処理が 10bit になったことでより高精細な映像表現が可能となった。



**2001**  
LEDディスプレイ  
**LVD-6**

6mm ピッチ LED ディスプレイ。屋内型。輝度 1,200nit。視野角（輝度 50%）水平 120°、垂直 120°。日亜化学工業製 SMD-LED を使用。



LVD-638G

**2001**  
LEDディスプレイ  
**LVD-10**

10mm ピッチ LED ディスプレイ。防水型ユニットを採用した屋外・屋内両用型。輝度 4,200nit。視野角（50%

輝度）水平 110°、垂直 +30° -45°。日亜化学工業製 SMD-LED を使用。



LVD-1064G



日本科学未来館 初代「Geo-Cosmos」に納入（2001 年）



**2002**  
LEDプロセッサ  
**DLC-118HD**

初のフルHD対応LEDプロセッサ。入力はRGBアナログ、DVI-D。最大出力18系統、表示解像度1,920×1,080dot。内部処理12bit、12bit階調（10億色）とフルHD解像度をリアルタイムで処理し、LEDディスプレイへ伝送する高性能モデル。同機の開発段階において、日本科学未来館の球体LEDディスプレイGeo-Cosmosのプロジェクトがスタートした。球体の最大外周が1,920dotであったことから開発中のフルHD対応モデルをベースに同館専用機を製造。その後DLC-118HDの開発を再開・発売した。

同機の開発段階において、日本科学未来館の球体LEDディスプレイGeo-Cosmosのプロジェクトがスタートした。球体の最大外周が1,920dotであったことから開発中のフルHD対応モデルをベースに同館専用機を製造。その後DLC-118HDの開発を再開・発売した。



**2002**  
インターメディアコンバーター  
**IMC-880**

インターメディアコンバーター。DLC-118HDとセットで使用する機器。LEDディスプレイの画質は、プロセッサに入力する信号の質に影響されることから、LEDディスプレイ・システムのフロントエンドに使用することを前提に開発。独自の高画質化エンジン、ガンマ補正回路、色の再現性を向上させるカラーマネジメント機能、フルデジタル入出力回路によって高画質な映像表示を実現した。DLC-118HDとの組み合わせはモーターショーでも高評を得る。レンタル会社への販売だけでなく、国内の常設設備への納入も進んだ。

向上させるカラーマネジメント機能、フルデジタル入出力回路によって高画質な映像表示を実現した。DLC-118HDとの組み合わせはモーターショーでも高評を得る。レンタル会社への販売だけでなく、国内の常設設備への納入も進んだ。



**2003**  
インスタント・リプレイシステム  
**Trigger Ver.1.5**

DAR社（イギリス）製のTriggerを踏襲したインスタント・リプレイシステム（ボン出しシステム）。ヒビノはDARのTriggerを国内放送局に販売していたが、2003年にDARの生産が終了。同システムの販売及びTriggerのサポートを継続するため、DARよりソフトウェア及び名称の権利を取得。Triggerを解析し、同システムに代わるものを設計・開発した。当時、標準化が進んでいたBWF-Jフォーマットファイルの編集機能「BE-100 for Trigger」を標準で搭載するなどし、ヒビノ製のTriggerをバージョン1.5として発売。DAR製もヒビノ製も名称は同じだが、設計はまったく異なるもの。

同システムに代わるものを設計・開発した。当時、標準化が進んでいたBWF-Jフォーマットファイルの編集機能「BE-100 for Trigger」を標準で搭載するなどし、ヒビノ製のTriggerをバージョン1.5として発売。DAR製もヒビノ製も名称は同じだが、設計はまったく異なるもの。



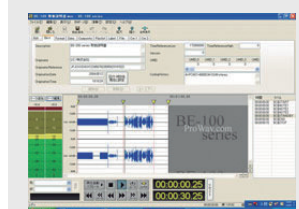
フロントパネル

リアパネル

**2003**  
BWF-J編集用アプリケーション  
**BE-100**

Windows PCでBWF-Jフォーマットオーディオファイルの編集・作成・閲覧ができるソフトウェア。2000年にBWF-JワーキンググループよりBWF-J第1版「BWF-J Level1運用規定」が発行された。2003年頃には標準化が進み、Trigger Ver.1.5で動作するBWF-J編集ソフトの開発に着手していたところ、ラジオ制作会社からの要望があり、一般のPCで動作可能なBWF-J編集ソフト「BE-100」を開発した。当時、BWF-Jフォーマットファイルの作成・閲覧は、高価な専用機でしか行えなかったが、BE-100はWindows OSを搭載する一般のPCにインストールするだけで、安価で簡単に導入可能だった。ラジオプロダクション等に多く導入される。

可能なBWF-J編集ソフト「BE-100」を開発した。当時、BWF-Jフォーマットファイルの作成・閲覧は、高価な専用機でしか行えなかったが、BE-100はWindows OSを搭載する一般のPCにインストールするだけで、安価で簡単に導入可能だった。ラジオプロダクション等に多く導入される。

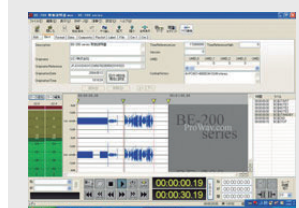


BE-100 操作画面

**2004**  
BWF-J編集用アプリケーション  
**BE-200 シリーズ**

Windows PCでBWF-Jフォーマットオーディオファイルの編集・作成・閲覧ができるソフトウェア。BE-100に録音、オーディオ編集などの機能を加えたもの。BE-100は、BWF-Jファイルのメタ情報を編集することはできたが、オーディオデータの編集はできなかった。Trigger Ver.1.5にあるようなオーディオ編集機能をBEに望む声を受け開発。安価にオーディオ編集及び

BWF-Jファイル編集が可能な同製品は、放送局、ラジオプロダクションに導入された。また、2003年11月に日本民間放送連盟及び日本広告業協会がラジオCMの納品フォーマットにBWF-Jの採用を決定したことから、05年以降の同製品にはCMチャック書き込み機能を搭載。日本広告業協会に採用され大手広告業者へも納入した。



BE-200 操作画面

**2004**  
LEDプロセッサ  
**DLC-106**

LEDプロセッサ。入力はRGBアナログ。出力はSD1×6系統。最大表示解像度XGA（1,024×768dot）。内部処理12bit。

常設設備への納入に力を入れる中、設備用途にマッチする機能に絞ったエントリーモデルとして開発。



**2005**  
LEDディスプレイ  
**LVD-3**

3mmピッチLEDディスプレイ。屋内専用型。輝度1,700nit。視野角（輝度50%）水平110°、垂直110°。日亜化学工業製SMD-LEDを使用。当時、世界最高の精細スペックである3.0mmピッチ、150インチの画面でXGA解像度を実現した。



表参道ヒルズに納入（2006年）

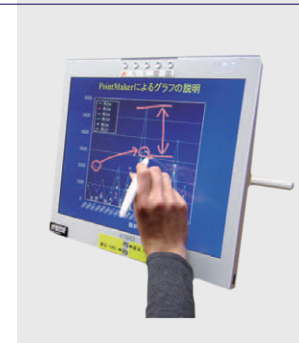


LVD-327G

**2006**  
手書き入力支援ソフト  
**PointMaker**

プレゼンテーション用手書き入力ソフトウェア。ワコム製の液晶ペンタブレットとセットで発売した。PointMakerは液晶ペンタブレットに描画した内容をスクリーンに反映するソフトウェアで、Power Pointはもちろん他のアプリケーションや動画の上にも書き込める。レーザーポインターやマウスのカーソルといった点ではなく「線」や「文字」でプレゼン資料のポイントを明示できるのが特長。任意の箇所を拡大表示する虫めがねモード機能も搭載した。対応OSは、Windows XP、2000、Me、98SE。

同製品は、ヒビノがイベント映像を手掛ける中で生まれた。当時、Power Pointのスライドショー画面上に手書き入力するシステムは、学会発表において好評を得ていたが大規模なシステムが必要であった。コンパクトかつ安価なシステムとしてPointMakerを開発。類似品は多々あったものの、設定・使用方法が煩雑なものも多く、誰にでも直感的な操作が可能なPointMakerは大学や病院など主に医療関係に受け入れられ、内科学会、腎臓学会では必需品となった。



**2006**  
LEDプロセッサ  
**DLC-612**

世界初の4K対応LEDプロセッサ。入力はHD/SD-SDI、DVI、RGBアナログ、NTSCなどほぼすべてのフォーマットに対応。最大出力12系統。最大表示解像度4,096×2,160dot。内部処理15bit。ChromaLED 6Bと同時発売。ヒビノの技術力を世界に訴求した。

従来、インターメディアコンバーターが担っていたカラーコレクターやスケララー機能部とLEDプロセッサ部を7Uサイズの筐体1台に集約した。当時は4Kのフォーマットが確立されておらず、フルHDの信号を4本入力して4Kを実現している。



2006  
LEDディスプレイ  
ChromaLED

高輝度・高精彩 LED ディスプレイ。日亜化学工業製の BLACK SMD-LED を使用。新開発のブラックレンズにより色彩の基調となる黒色の再現性を格段に向上させ、臨場感ある映像を実現した。  
最初に発売した 6mm ピッチモデル ChromaLED 6B は国内外のレンタル会社や常設設備に採用され、ChromaLED シリーズのベストセラーとなった。

ChromaLED



ChromaLED 6B



2012 年「渋谷ヒカリエ」に納入した ChromaLED 6B (2006 年発売) 6mm ピッチ、屋内専用型/屋外対応型をラインアップ、輝度 2,000nit / 5,000nit



ChromaLED 4B (2007 年発売) 4mm ピッチ、屋内型、輝度 1,500nit



2008 年「日本橋国分ビジョン」に納入した ChromaLED 15B (2008 年発売) 15mm ピッチ、屋外型、輝度 5,000nit



ChromaLED 10B (2008 年発売) 2008 年「マイティビジョン渋谷 (現 MUSEE Channel)」に納入 10mm ピッチ、屋外型、輝度 5,000nit



2010 年「赤坂サカス Sacas400」に納入した ChromaLED 8B (2009 年発売) 8mm ピッチ、屋内・屋外向用型、輝度 5,000nit



2013 年「QFRONT」ビル壁面に納入した ChromaLED 9B (2010 年発売) 9.5mm ピッチ、屋外型、輝度 5,000nit



ChromaLED 3D (2010 年発売) 6mm ピッチ、屋内型、輝度 730cd/m<sup>2</sup>。独自の円偏光ドットバइट方式を採用した 3D 対応モデル。レンタル会社等へ販売

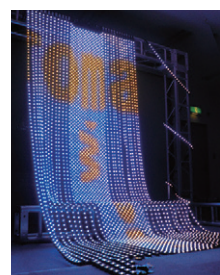


ChromaLED 2B (2013 年発売) 2.4mm ピッチ、屋内型、輝度 2,000nit。ChromaLED の最精細モデル

2007  
フレキシブルドットラインユニット  
LumixxLine

世界初のフル動画送出ロープ型 LED ディスプレイ。35mm ピッチと 70mm ピッチの 2 モデル。屋内型。輝度 2,000nit。日亜化学工業製 SMD-LED を使用。柔軟性と強度を両立した特殊ラバーロープ上に、高輝度 SMD-LED 素子を 96dot 配列。カーブやウェーブなど形状を自由に創造できる。デザイン性が重視される設計会社へのアプローチや欧州からのリクエストに対応して開発した。

LUMIXXLINE



LumixxLine 35

2008  
BWF-J 対応・ボン出しアプリケーション  
BE-200T II

BWF-J フォーマットオーディオファイルを作成・編集できるボン出しアプリケーション・システム。オプションで専用コントローラーもラインアップしている。  
2004 年に「ボン出しプレイリスト規格書 第 1 版」及び BWF-J 第 2 版「BWF-J レベル 1 運用規定」が公開され、06 年頃からラジオ番組交換フォーマットとしての BWF-J ファイルが具体的に次のステップへ移行し始めた。放送局から Trigger Ver.1.5 の後継機の要望があり、2006 年下旬より BE-200T II の開発を開始。

開発当初は従来の BE シリーズ同様、オフライン編集で使用可能な仕様だったが、ソフトウェアの機能や使い勝手の良さから Trigger Ver.1.5 のようにオンラインでの使用を受け、専用の PC ユニットの製作。専用にチューニングした PC (BE-PC シリーズ) の採用により生放送でも安定した運用が可能となった。ユーザーごとに個別の機能を搭載することも可能なため、ニーズにマッチするソフトウェアとして放送局に採用されている。



BE-200T II 操作画面



コントローラー KP-1

コントローラー KP-3

コントローラー EC-1

2008  
LED プロセッサ  
DLC-401

LED プロセッサ。入力は HD/SD-SDI、DVI、NTSC など主要フォーマットに対応。出力 1 系統。最大表示解像度 XGA (1,024 × 768dot)。内部処理 15bit。DLC-612 の機能をシェイプしてコストダウンを実現した

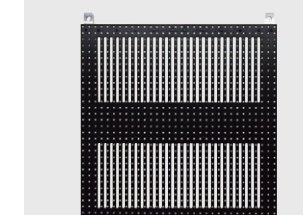
ベーシックモデル。開発のきっかけは常設用途だったが、スタンダードクラスのプロセッサとしてロングセラーとなる。



2008  
LED ディスプレイ  
Chromawall

全天候型シースルー LED ディスプレイ。12mm ピッチ。屋内・屋外向用。輝度 4,200nit。視野角、水平 ± 70°、垂直 ± 60°。日亜化学工業製 SMD-LED を使用。LED モジュール 1 枚当たり約 2.7kg のファンレス軽量モデル。シースルー構造で画面の背景が透けて見える。Hibino Asia Pacific Limited が企画・開発した。台湾でものづくりをした初号機。防水処理には、新たな試みとなる蒸着コーティングを採用した。軽量で大画面を構築できる同機は、レンタル市場、常設設備ともに高い評価を得る。

Chromawall



Chromawall 12



秋葉原 UDX ビジョンに納入 (2012 年)



2010  
ヘッドホンアンプ

高級イヤホンブームの先駆けとなる Shure 製イヤホンを取り扱っていたヒビノ。高級イヤホンが市場として確立したのち、イヤホンの性能を最大限駆動するクオリティの高いアンプのニーズが高まると予測し、「ヘッドホンアンプ」という新たなマーケットの開拓に乗り出した。当時、音にこだわるオーディオファンに人気の高かった「iBasso Audio」と交渉し、良好なパートナーシップを結ぶ。両社で協力して製品開発を行い、ヒビノオリジナルモデルを日本に投入した。2010年、「D2+ Hj Boa」「T3 Hj」を発売。同2機種は、iBasso Audioの知名度を押し上げる契機となる。T3 Hj (Hjは、ヒビノジャパンの頭文字)は、小型で極薄ながら接続した機器の音質を格段に向上かつ、38時間の長時間駆動を実現。D2+ Hj Boaは、当時としては珍しいポータブルタイプのD/Aコンバーター内蔵ヘッドホンアンプで、外で使うだけでなく、自宅でもPCと接続して使える多機能性で人気機種となった。ヒビノは大手量販店を中心に販売を拡充。ヘッドホンアンプに興味があっても手に取ることのできなかつた客層まで販路を広げることに成功し、これ以降、ヘッドホンアンプ市場は拡大していく。同年12月には、DACやアンプ部を左右個別に駆動し、光や同軸入力・USB

入力など多機能を凝縮した当時のフラッグシップモデル「D12 Hj」を発売。その後も新製品を精力的に展開し、高品位なD/Aコンバーターを搭載した「D5 Hj」に続きT3 Hjの後継モデル「A01」、コンパクトながら大出力を実現した「A02」を連続して発売。ヘッドホンアンプ市場で、高いブランドバリューとシェアを確立した。ハイレゾ音楽配信が本格化し始めた2013年には、24bit/192kHzのハイレゾ音楽に対応した「D55」を発売。32bitタイプの高性能なD/Aコンバーターを採用したD55はロングラン商品となっている。同年6月、音質に定評のある高性能D/Aコンバーターを搭載した「D zero-SE」を発売。D zero-SEは携帯端末とのデジタル接続を可能にした意欲作で、「携帯で高音質を楽しむ」という新たな音楽スタイルを呈した。ハイレゾが時代のトレンドとなり、スペックに対する要求が高くなった2014年には、hibino/iBassoブランドの「MICRO PRECISION DH1」を発売。幅広いハイレゾ音楽フォーマットをすべてネイティブで再生でき、ヘッドホンアンプ部もハイパワーな本製品は現時点の人気機種となっている。現在、ヘッドホンアンプ市場は拡大を続けている状況。ユーザーの関心も高まる中、iBasso Audioはユーザーのニーズを的確にとらえた意欲的な商品を開発し続けている。



2010年7月発売  
DAC内蔵小型ヘッドホンアンプ  
D2+ Hj Boa



2010年7月発売  
超小型ヘッドホンアンプ  
T3 Hj



2010年12月発売  
DAC内蔵小型ヘッドホンアンプ  
D12 Hj



2011年7月発売  
USB-DAC内蔵小型ヘッドホンアンプ  
D5 Hj



2011年12月発売  
超小型ヘッドホンアンプ  
A01



2011年12月発売  
小型ヘッドホンアンプ  
A02



2013年4月発売  
USB-DAC内蔵ポータブルヘッドホンアンプ  
D55



2013年6月発売  
USB-DAC内蔵ポータブルヘッドホンアンプ  
D zero-SE



2014年6月発売  
USB-DAC内蔵ヘッドホンアンプ  
MICRO PRECISION DH1

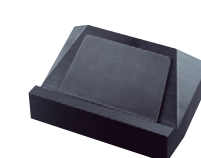
2012  
ハイレゾ対応ミュージックプレイヤー

従来のデジタルオーディオプレイヤー（以下DAP）は、MP3などの圧縮音源の再生が主流で、音質にこだわるユーザーを満足させる商品はありませんでした。そうした状況の中、ヒビノは音質に極限までこだわったDAPの開発が新たな市場を創造できると考え、既存概念を覆すDAP「HDP-R10」の開発をスタート。iBasso Audioの協力により、音の入口から出口までのすべてをHDクオリティで伝送する「High Precision Trinity construction」構想をベースに製品コンセプトを決定。非圧縮やロスレスフォーマットによるハイレゾ音楽再生を可能とし、据置型高級Hi-Fiオーディオ製品でのみ採用されていた極めて高品質なD/Aコンバーターや増幅素子を使用することで徹底的に音質を磨き抜いたHDP-R10を開発した。HDP-R10は8万8,000円という高価格帯の商品ではあったが、ビジュアル・グランプリで「ハイレゾ」の新たな地平を切り拓いたことに対する「企画賞」を受賞するなど極めて大きな反響を獲得。生産が追いつかなくなるほど話題の商品とな

った。同時にHDP-R10のアクセサリとして発売したアルミニウム・モノブロック削り出しによるマウントベース「Nrmb」も日本国内の特殊加工専門工場で高度な全面ヘアライン加工を施した特別な製品として、HDP-R10とともに大きな話題となった。2014年には、軽さや操作性を追及したミュージックプレイヤーの新モデル「DX90j」を発売。優れたコストパフォーマンスながら精度の高い生産が可能な工場による製造、高品位な基板用ハンダの採用など音質はもちろん耐久性にも考慮した日本モデルとして現在も好評を得ている。現在は高級イヤホン市場だけでなく、ポータブルヘッドホンアンプ市場、ハイレゾDAP市場ともに大きく拡大し、多くのメーカーが競合しながらしのぎを削る状況となっている。その中でもハイレゾDAPを他社に先駆けて投入したiBasso Audioは先駆者としての確固たる地位を確立している。



2012年8月発売  
Reference High Definition Music Player  
HDP-R10



2012年11月発売  
携帯音楽プレイヤー用マウントベース  
Nrmb



2014年7月発売  
ハイレゾ対応ミュージックプレイヤー  
DX90j

2012  
ユニバーサル型LED防災ボード  
infoLED

J-ALERT（全国瞬時警報システム）を受信・伝達するLEDディスプレイ。6.4mmピッチと12mmピッチをラインアップ。屋内・屋外用。日亜化学工業製SMD-LEDを使用。平時は広告などを表示。有事にはJ-ALERTを受信し、自動で緊急情報を放映する。外国語や音声警報にも対応。

infoLED  
リチウムイオン電池内蔵で停電時にも24時間以上、表示機能を保持する。東日本大震災で大型映像が機能しなかった例をきっかけに開発。平時・有事ともに価値ある情報を発信できるLED表示装置として企画した。



品川駅港南口広場に設置（2014年）

2014  
LEDプロセッサー  
HLC-4K

ハイエンドクラスLEDプロセッサー。入力はDVI-D、RGBアナログ、HD-SDI等に対応、最大6系統。出力は12系統（標準）。表示解像度4,096×2,160dot。内部処理15bit。

HLC-4K  
Dual Link SDI入力を備えた4K対応モデル。DLC-612の後継機。複数台をリンクすることで8K映像表示にも対応する。



2014  
LEDプロセッサー  
HLC-101

エントリークラスLEDプロセッサー。入力はDVI-D。出力は1系統、表示解像度は1,024×768dot。内部処理10bit。

HLC-101  
屋外街頭ビジョンなど、高解像度を要求しない用途向けに機能を集約したモデル。筐体はコンパクトな1Uサイズ。

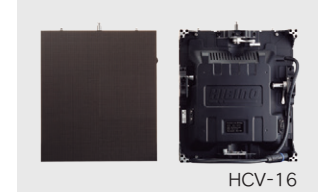


2014  
LEDディスプレイ  
ChromaVision

1.69mmピッチの超高精細LEDディスプレイ。BLACK SMD-LEDを使用。屋内型。輝度1,000cd/m<sup>2</sup>。視野角、水平・垂直160°。ディスプレイの心臓部には独自制御回路を搭載し、ヒビノならではの超高画質を実現。



Inter BEE 2014で初披露  
約293インチの画面に3,840×2,160dot  
の4K映像を放映



HCV-16